

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



実寸大
エサ付け
&
オモリ
解説付き

へらエサ パワーブック

HERA BAIT POWER BOOK
2013

Contents

- 02 「セットガン」 特徴解説
- 06 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 10 ウドンセットのチョーテン釣り
- 14 段差の底釣り
- 18 くわせ(ウドン)エサ大解剖!
- 20 バランスの底釣り釣り方解説
- 22 両ダンゴの底釣り
- 24 両グルテンの底釣り
- 26 グルテンセットの底釣り
- 28 グルダンゴの底釣り
- 34 へらエサ性質表

ふゆはるごら
冬春



「セットガン」 現代セット釣りの救世主!

近年のウドンセット釣りのむずかしさは、何といってもバラケエサの使い方の多様性に尽きます。それは単純にバラケエサを持たせたり抜いたりするということのだけではなく、時々刻々

変化する状況に合わせてバラケのタッチを合わせつつ、さらに持たせ方(主にハリに残るバラケの量や抜き方)主に抜くタイミング)を調整しなければ安定的にアタリが持続しないという複雑さに起因しています。

この釣りを得意としているアングラーは、バラケエサのブレンド構成で基本的な方向性を決めつつ、手水や攪拌によりタッチの微調整を行ない、さらにエサ付けの圧・形状・サイズなどを、状況に合わせて正解エサに仕上げています。

こうしたテクニクは、ビ

ギナーはもちろんのこと、中級者クラスであっても決して容易ではありません。なかでも釣り方ごとに異なるバラケのコントロール方法は、よりセット釣りを複雑なものにしているようです。

どういふことかといえ、浅ダナや段差の底釣りにおいてはバラケエサを状況により持たせたり、タイミング良く抜いたりすることでアタリがやすく、チョーチン釣りでは徹底的に持たせることで時合に持ち込みやすい傾向があるため、同じバラケのブレンドやタッチでは、すべてのセット釣りに対応することは困難なのが実情なのです。

そこで現代セット釣りの傾向にマッチしたバラケを軸として、性格の異なる素材をブレンドすることでより正解に近いタッチが得られ



配合されている粒子は全体的に粗めで比重がある。特に目立つ黄色い粒子は新開発された高機能ペレット。また、特別加工が施された粒状さなぎが集魚力を高めている。

るバラケのベースエサ「セットガン」が考案されたのです。このエサの特徴は何といっ

ても徹底した縦バラケです。そして開きは強めですので、必ず他の素材をブレンドし

※切取線 ここからお切りください。 原料は新鮮な魚に、配合を合わせ味が軽やかで美味しく食べていただけます。

天然&食品素材100%

本品は天然食品素材のみ使用しておりますので、水中で自然に分解されます。

丸 マルキュー 優良釣餌

ライト系! パワー系!
あらゆるセット釣りに対応するバラケ専用ベースエサ

粒感のある特別な魅は粒子感が持続し作りたてのタッチを維持!
・集魚効果抜群の特別加工した粒状さなぎを大量配合!
・バラケ専用開発した高機能ベレットでくわせエサへの反応を強化!

セットガン専用バラケベースエサ

バラケ性	超強	中	弱
重さ	重	中	軽

CLEAN SETGUN 製品番号 2269

「わらび職人」



わらび系、タビオカ系ウドンに使える安定液。作りたての状態を維持できるうえ、比重も変わらない。手などへのベトツキもなく使い勝手が抜群です。

て使うのが前提となります。構成される素材のひとつひとつは粒子が粗めで比重があります。特に目立つのが黄色い粒子。これが新開発された高機能ベレットで、ほとんど溶けたり型崩れしたり

することがないため、エサそのものが経時変化でネバることがほとんどないのです。さらに特別加工が施された粒状さなぎが集魚力を高め、これらが絶妙の比率で配合されているため、寄せたへら鮎を確実にくわせエサへと誘導する性能に優れているのです。

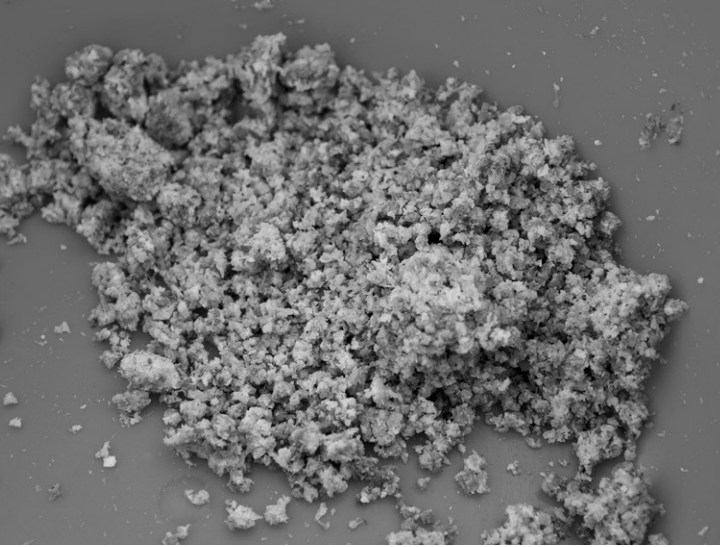
この「セットガン」の特徴を活かすためのエサ作りのコツは、目的(ねらい)に合わせてブレンドする魅エサを上手に換えることです。

たとえばパワー系でガンガン寄せて釣りたいときには、開きが良く集魚力に優れた「底バラ」と、高比重でまとまり感があり多少ラフに扱ってもタナを安定させることができる「どうスイミー」をブレンドします。

また、くいが悪く1枚1枚丁寧に釣り込む必要がある

ときに有効な、いわゆるライト系のバラケに仕上げたときには、軽めでまとまり感がありタッチの調整がしやすい「軽魅」などをブレンドすると良いでしょう。

さらに厳寒期、抜き系のバラケであってもタナに滞留する量の量を増やし、レスポンスの低下したへら鮎の摂餌を刺激したいときには「スーパーダンゴ」などの軽量素材



ブレンドした素材の特徴をいかしてくれるので、明確なねらいをもってブレンドするエサを選ぶこと。



「セットガン」

現代セット釣りの救世主！

「セットガン」おすすめブレンド

ライト系

セットガン 200 cc + 軽麩 200 cc +
とろスイミー 50 cc + 水 100 cc



+



+



+



パワー系

セットガン 200 cc + 底バラ 200 cc +
とろスイミー 50 cc + 水 100 cc



+



+



+



がマッチします。

「このように「セットガン」はバラケエサの軸として使うことで、ブレンドする他の素材の特性を引き出すとともに、自らの特徴を最大限発揮することができるエサなのです。

ポイントとして「セットガン」にブレンドするエサには必ず明確な目的意識を持つこと。そうすることにより状況にマッチしたバラケエサ作りができ、またあらゆる状況に対応できる細かなエサ合わせが可能になります。これはセット釣りが得意な人はもちろん、今までセット釣りが苦手な人にとっても極めて明るいニュースであり、エサ合わせのテクニクの上上ともに、苦手克服の強力な味方になるに違いないでしょう。

ウドンセットの浅ダナ釣り

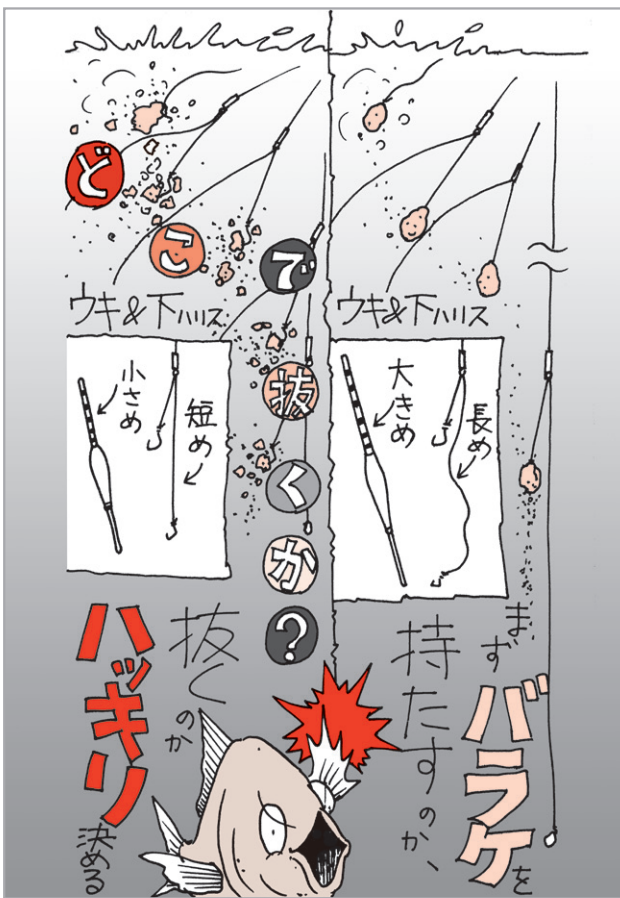
釣り方の基本とコツ

近年ウドンセットの浅ダナ釣りは大きな転換期を迎えています。一定のパターン化された組み立てに持ち込むことが極めてむずかしい、目まぐるしく変化する場合に合わせてバラケもくわせも調整を加え続けなければ、安定した時はおろか、アタリすら持続させることがむずかしいのが現状です。つまり、パターン化された基準があつてないようなもので、ウキの動きが悪くなる前に、先手先手で対処していかなければ、決して満足な釣果は得られません。さらに同じウドンセットの浅ダナ釣りであっても、そのアプローチが違うとタックルやエサ使いにも大きな違いが生じてしまうため、攻め方に合わせてエサ・タックルを高い精度でマッチさせる必要があるのです。

こうしたむずかしさをもった現代ウドンセットの浅ダナ釣りをできる限り簡単に組み立てるためには、まず明確にアプローチ方法を決めることが肝心です。つまり、バラケを持たせて釣るのか、それともバラケを抜いて釣るのかハッキリと

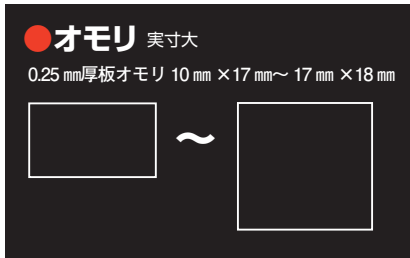
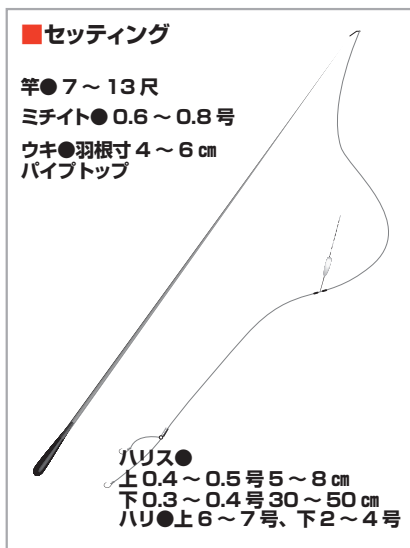
決めることです。そしてこの選択を決めた上でタックルを煮詰め、バラケを煮詰め、そしてくわせエサを合わせ、時合を目指しますが、いずれが正解なのかを決めるのはもちろんへら鯛であり、釣り人はそれをウキの動きからいち早く見抜かなければ

ばなりません。たとえば、バラケを持たせて釣るほうが良い場合は、そのバラケを支えることができるウキの浮力と、バラケの拡散範囲のどこまで接近してくるのかを判断し、下ハリスの長さを決めることが重要なポイントになります。



セッティングの注意点

くいの良し悪しに合わせたウキの選定（浮力）が重要で、くいが渋くなるほどオモリ負荷量の少ないものでないと極端にアタリがでにくくなる。また下ハリスはカラツンを警戒した短めのセッティングよりも、やや長めでスタートして徐々に短くするほうがへら鮎のコンディションを読みやすく、その後のアジャスティングのロスが少ない。竿は規定最短尺～10尺が基本だが、新べらがややゆめに居着く釣り場では13尺までは想定範囲とする。



す。一方、バラケを抜いたほうが良い場合は、なんといてもバラケを抜くタイミングが重要になります。ナジミ幅をまったくささずに抜くのか、それともいったんナジませてから抜くのか、またそのタイミングは早いのかそれとも遅いのか。もちろん、この場合もバラケの粒子とくわせエサのシンク口状態を想像して、ベストと思われる下ハリスの長さを導きださなければなりません。

一般的にはバラケを持たせる釣りではウキは大きめで下ハリスは長め、バラケを抜く釣りではウキは小さめで下ハリスは短めで決まる傾向で、これに合わせてバラケの基本タッチを合わせる時、バラケを持たせる場合は硬めのネバボソ系で、バラケを抜く場合は軟らかめのシットリボソ系をベースとするのがセオリーとなります。

さらに、くわせエサの使い分けもその重要性を増しています。以前のように絞りだしのわらびウドン一辺倒ではアタリを持続させることがむずかしく、目先を変えてへら鮎の摂餌を刺激するためにも複数のくわせエサを使い分ける必要性が高まっているのです。そのためサイズや重さの異なるくわせエサを数種類用意し、時々交換しながら最も反応の良いものを選択するのが得策となります。

くわせエサ

くわせエサの種類が多様化しているのは、日によって当たりのエサがあったり、目先の変化で反応させたりするためだ。



おすすめバラケブレンド

バラケ性・比重ともに中間的な基準的なブレンド

セットガン200cc + GTS200cc + とろスイミー50cc + 水100cc



●作り方

エサをボウルに入れ、良くかき混ぜてから水を注ぎ、指を熊手状に開いて20～30回かき混ぜる。水がいき渡ったらダマをほぐして約5分放置。シットリしたタッチにするときは、手水を加えてかき混ぜる。

●特徴

標準的な活性下での基準的ブレンド。バラケ性・比重的にも中間的な「GTS」と組み合わせることで、浅ダナ釣りでは必須テクニックであるタッチの幅広いアジャスティングが容易になる。また「とろスイミー」が加わることでまとまり感が増し、ウズリをあまり気にしないで早いアタリをねらった抜き系の攻めの釣りが可能になる。

●使い方のコツ

打ち始めは小分けしたものに押し練りを加えるか、摘み取ったエサに強めの圧を加えてハリに付けること。そしてナジミ幅とウキの戻り具合（バラケ加減）をみて加える圧を調節する。最終的に抜きバラケで決まるときでもスタート直後はしっかりナジませて、ある程度タナを作ってから抜き加減を早めていくほうが安定した時合を構築しやすい。

ウドンセットの浅ダナ釣り

ブレンドの考え方

ベースエサ



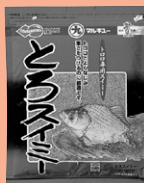
セットガン

新開発の高機能ペレットと特別に加工された大きめの粒状さなぎが大量に配合されており、セット用バラケのベースエサとしておなじみの「セット専用バラケ」や「パワー・X」に比べて粒子感が強いいため、よりハッキリとした縦バラケの性格を持つと同時に、長時間作り立てのタッチを維持できる性質をもつ。



GTS

練らずに仕上げただけでもフワッとまとまる性質があるが、練ることでさらにエサ持ちが良くなるため、タッチの調整幅が広がる。



とろすいミー

「セットガン」の強い性格をややマイルドに抑えつつも、基本となる縦バラケの性格を強調する効果がありタナが作りやすくなる。

ブレンドエサ

●エサの大きさ

実寸大



ブレンドの調整

バラケが開き過ぎてくわせエサに接近してこないときは「GTS」を「軽麩」に替えてまとまり感を増す。また寄りが乏しいときに単純に集魚力を増すのであれば「GTS」を「底バラ」に替えることでより寄せ効果はアップする。一方で寄っているがくわせエサへの反応が悪いときは「粒戦」を適宜加えることで摂餌を促す効果が期待できる。



※「粒戦」はそのまま加えるとより速効性があるが、多く入れ過ぎると下ずる恐れがあるので少量ずつ加減して加えること。

ウドンセットのチョーチン釣り

釣り方の基本とコツ

この釣りの最近の傾向と

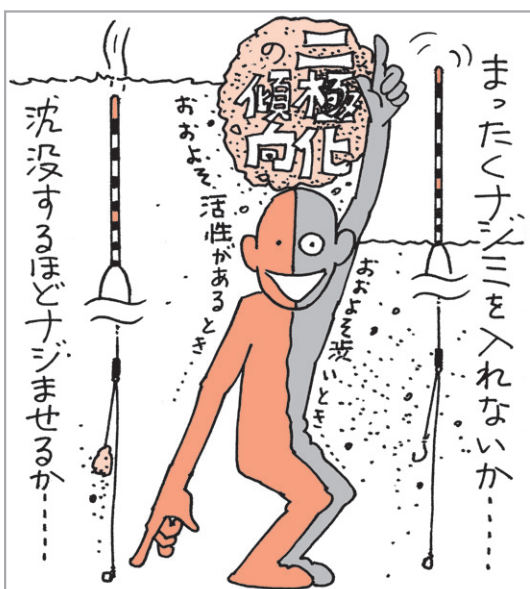
して、ウキを沈没するぐらい
しっかりとなじませるか、それ
とは真逆にまったくナジミ
を入れないか両極端になり
つつあります。もちろん、失

敗が少ないのは前者のウキ
をしっかりとなじませて釣っ
ていくほうですが、後者の
パターンも目に付くようにな
っています。いずれにせよ、
中途半端に持たなかつたり
持ったりするよりは、しっか
り持つか全く持たないかど
はつきりさせたほうが結果
がやすいようです。絶対と
は言えませんが、活性がある
ときは大きなバラケを使っ
てウキのトップが沈没する
ぐらいどっぷり入れて強固
なタナを作っていく釣り方
が良く、冬場の渋いときはく
わせエサがぶら下がったと
きにはバラケがほとんど抜
けているような抜き系の釣

り方が良いようです。

近年流行の縦誘いですが、
言葉としては誘いと言って
ますがどちらかと言えば聞
きアワセ誘いのイメージに
近いです。

まずは、いったんウキが
沈没するぐらいなじませて
から大きく強く竿を煽りま
す。これはバラケを促進し
アピールする誘いです。この
あと、再びなじんでいくな
かで、サワリやアタリがで
るのですが、そのときちょっ
と弱めの動きやもしかして
くっっているかな程度の動き
もできます。これはハリスが完
全にぶら下がった状態でな
いので起こるのですが、くっ
ているかもしれないし、そう
でないかもしれません。
そこで、そのような動き
がでたときに聞きアワセを
します。くっついていればその
まま持つていってくれます



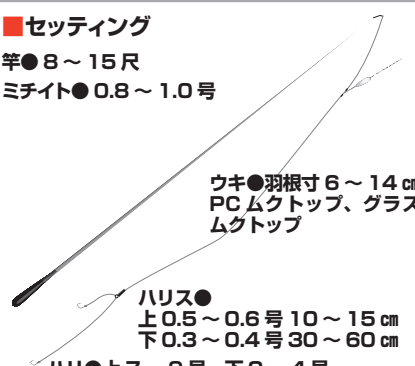
し、そうでなければそれが
誘いになるのです。ですから、
これはくいアタリだと自信
が持てる強いアタリ以外の
ときは、この聞きアワセを多
用します。そうすればくわせ
るチャンスが続くのです。
そして、この聞きアワセを
上手くこなすことが、釣果
を伸ばすコツにもなってお
り、ただやみくもにやって
は意味がありません。強弱・
大小を組み合わせ、アピール
なら強め・大きめ、くわせる
ための誘いなら弱め・小さめ
となります。また、ゆっくり
大きく、小さく早くなど様々
なバリエーションを駆使し
てみるとその日に反応しや
すいパターンが見えてきま
すので、それを見つけること
も重要なのです。

セッティングの注意点

通常は、短竿（8～10尺）をメインと考えても良いが、魚がいる気配があってもなかなかアタリがでないときは、それ以上の長さの竿をだす。高活性で大きなバラケを使う釣りのときは、上バリを大きめに仕掛け全体も強めにする。抜き系の釣りの場合は、その逆で仕掛け全体を軽くする。縦誘いを駆使するので、ウキをセットする位置は穂先からウキ1本分以内にするほうが良いが、流れなどがある釣っているときに穂先とウキが離れると引っ張ってしまうので注意したい。

■セッティング

竿●8～15尺
ミチイト●0.8～1.0号



ウキ●羽根寸6～14cm
PCムクトップ、グラスムクトップ

ハリス●
上0.5～0.6号 10～15cm
下0.3～0.4号 30～60cm

ハリ●上7～9号、下2～4号

●オモリ 実寸大

竿8尺なら0.25mm厚板オモリ 17mm×25mm



竿15尺なら0.25mm厚板オモリ 17mm×45mm



こうしながらエサを打ち続けていき、タナにへら鮒が集まってくると、より明確なズバ消し（ズバツと消し込む）のアタリも増えてきますし、くわせエサだけの状態で誘って当たるとタナができていく証拠です。

抜き系の釣りは、バラケへの反応が弱いときに効果的です。その1投で釣るのではなく、何投か繰り返し返していくうちに、上層で抜けたバラケ

がタナで漂うようになり、薄く漂う粒子にゆっくりに寄ってきたへら鮒がそこのあるくわせエサも吸い込んでしまうという図式です。活性が低いときでも上からゆっくり降ってくるものには、それなりの反応をします。一定のリズムでたんだんとエサ打ちを繰り返すことで、絶えずタナにバラケの粒子が漂うことになり、へら鮒を

くわせエサ

高活性時はエサ持ちが良く重さもある「魚信」や、くいが渋くなるにつれて軽い「力玉大粒」、「力玉」（「さなぎ粉」漬）や「感嘆Ⅱ」、「感嘆」などがよい。ただ、日によって反応が得意なものもあるので、色々使い分けてみることで。



おすすめバラケブレンド

標準・重い・軽いの3タイプ

標準タイプ

セットガン200cc＋底バラ200cc＋
とろスイミー50cc＋水100cc



●特徴

高性能バラケ「セットガン」をベースに「底バラ」をブレンドし縦へのバラケ性を強調したブレンド。「とろスイミー」をブレンドすることでエサ付けしやすくなる。

重いタイプ

ペレ道100cc＋セットガン300cc＋
パウダーベイトヘラ100cc＋水100cc



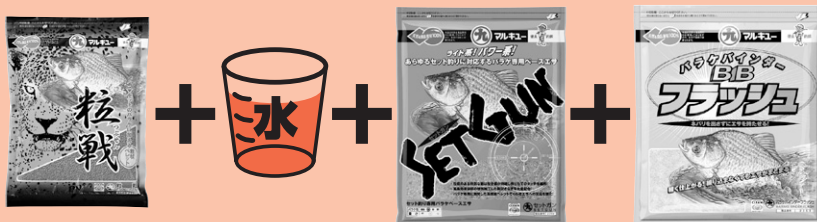
●特徴

高性能バラケ「セットガン」に「ペレ道」をブレンドして重さを強調。「パウダーベイトヘラ」がタナまでの開きを抑制するので、タナまで持って開く。ウキをどっぷり入れる釣りに向いている。

ウドンセットのチョーチン釣り

軽いタイプ

粒戦100cc+水100cc+セットガン 300cc+BBフラッシュ100cc



●特徴

軽めで開くタイプで「BBフラッシュ」が開きすぎを抑制してくれるので抜き系でも持たせても使える。軟らかくして使うときは「セットガン」を200ccにすればよい。

ブレンドの考え方

開くエサを持たせるがこの釣りのバラケエサの特徴。ベースとなる「セットガン」にブレンドエサ①のタイプで重さや開きを強調し、ブレンドエサ②のタイプでエサ持ちを調整している。

ベースエサ



ブレンドエサ②

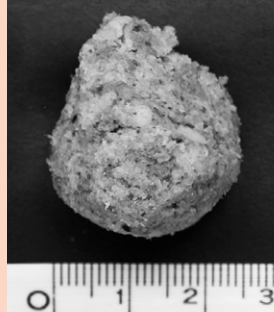


ブレンドエサ①



●エサの大きさ

実寸大



※どのタイプのブレンドでも「粒戦」100cc+水70ccを別作りで用意しておき開き具合を調整する。

段差の底釣り

釣り方の基本とコツ

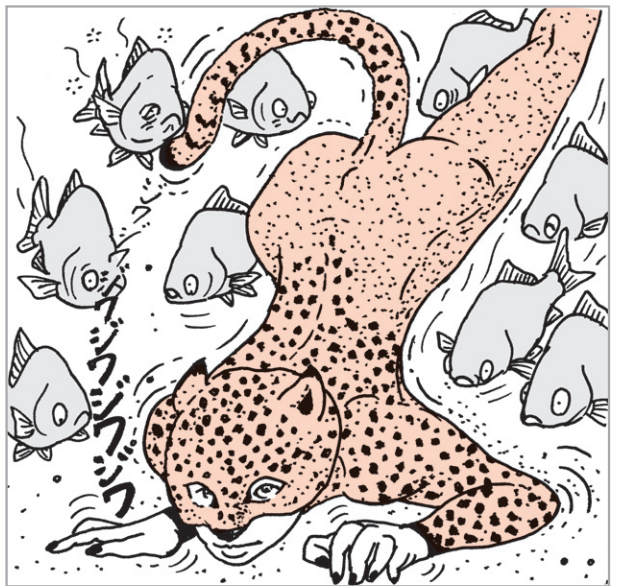
段差の底釣りは、宙層に存在するバラケエサを真下に近いイメージで底に落下させ、着底しているくわせエサに反応させる釣り方です。とくに宙釣りではアタリすらでないような厳寒期に強い釣り方でもあります。

近年では、バラケエサの抜き方によって釣果が驚くほど変わるので、バラケエサの使いこなしがシビアになっています。しかし、基本的には縦方向（底方向）の誘導に変わりはなく「粒戦」や「粒戦細粒」といった下方向へ落ちていくエサをブレンドし、底からやや上方にいるへら鮒を底に向かせるようにします。

ワとゆつくりですが確実に落下するようなタイプが求められます。水深が3〜4m程度であればタックルでカバーできることもありませんが、それ以上の水深になると、より一層ブレンドする素材の特性が問われるようになります。

釣っていくなかで大切なのは、タナを作る。というイメージで、まずはバラケエサをしっかり付け、できればエサ落ち目盛りから4〜5目盛りぐらいはナジむようにすることが第一段階です。

次にアタリを取る位置については、基本的にバラケエサが抜け始め、スタート時は完全にバラケエサが切れてからのアタリに絞り込んでいくほうがベターです。それは、バラケエサがまだ付いている段階ではアワせた瞬間にハリに残っているエサ



が宙に舞い、ウズズリを招く危険性が高くなるからです。それゆえに釣り始めはとくに、その目のへら鮒の状況牢牢把握するためにもバラケエサが抜けてからのアタリに絞っていくほうが失敗は少ないのです。

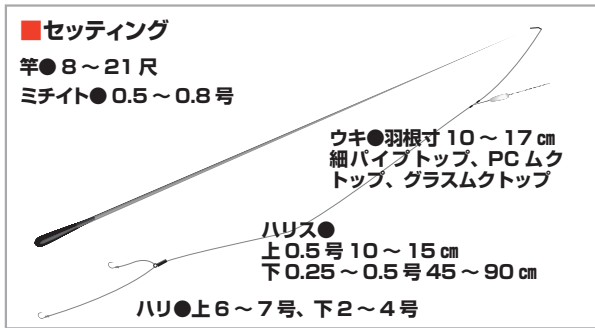
ラケエサを塊のまま抜いたほうが反応することも多く、そんなときにはヤワネバのエサを使って、ナジんだところで強めの縦誘いを入れてエサ切れさせる方法もありますので、頭の片隅にでも覚えておいて下さい。

また、近年の傾向としてバ

アタリのだし方として、く

セッティングの注意点

基本、オーソドックスなもので良いが、水流が発生したときにはより繊細なタックルが必要になる。そういう場合はミチイトをフロロラインの0.5号にする。また、厳寒期で下ハリスを60～90cmぐらいにするときには、なかなかハリスが張りにくくなるのでフロロラインを使用すると良い。この場合は、張りを重視して0.4～0.5号するとキレのあるアタリができることもあります。

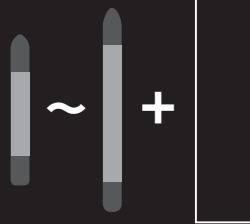


わせエサだけの状態になつてから、くわせエサを置き直すような誘いを多用します。そのためにも、サオは水深に合わせるようにして穂先からウキまでの位置までを狭くし、テンションを掛けやすくしましょう。また、ウキから下のミチイトを張

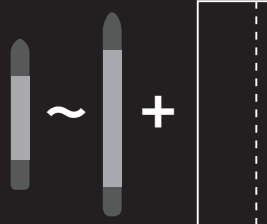
らせるためにも浮力のあるウキを使います。ウキのトップは12月一杯までは好活性時も多いのでパイプトップ(太いものはNG)でも良いが、厳寒期は僅かな変化も見極めやすいムクトップのほうが釣りやすくなります。

●オモリ 実寸大

●水深2～4mの場合
「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 8mm × 30mm
～
「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 8mm × 30mm



●水深4～6mの場合
「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 8mm × 30mm
～
「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 10mm × 30mm



●くわせエサ

くわせエサはエサ持ちが良く重さのあるウドンを使うのが基本だが、くいが渋いときは軽めのエサを使うとアタリが増えることもある。また、色の違いでも変わるの、重さの違い、色の違いで数種類を用意しておきたい。



おすすめバラケブレンド

絶妙なバラケ具合と落下速度で底にへら鮒を呼び込む

**粒戦 100cc + 粒戦細粒 50cc +
水 200cc + セットガン 200cc +
ガッテン 200cc + スーパーダンゴ 200cc**



●作り方

「粒戦」と「粒戦細粒」に水を注いでかき混ぜ5～6分放置する（厳寒期は7～8分）。そこに「セットガン」、「ガッテン」、「スーパーダンゴ」を入れて指を熊手状に開いて大きくかき混ぜる。ややボソッとしたタッチに仕上がるので半分に小分けして手水を打ちながらタッチの微調整を行なう。

●特徴

重い麩、粘る麩、軽い麩を絶妙にブレンドし、その麩材が「粒戦」、「粒戦細粒」と絡み合い、緩やかに落下しながら縦方向にバラける。タッチをやワシットリにしていると、さらに静かに粒子が落下するので、厳寒期の渋いときに有効である。

●使い方のコツ

エサを手直しするときは、すべてのエサを1度に手直しするのではなく、小出しにしながら微調整する。3m前後の水深ならばやや硬めのボソでも良いが、それ以上の深いタナの場合は開きを抑えるためにシットリ系に調整したほうがウヅリを防ぐことができる。

段差の底釣り

ブレンドの考え方

調整エサ



粒戦

バラケエサの中からポロポロとこぼれることでアピール力があり、また底に溜まることで時合維持にも貢献している。



粒戦細粒

粒子が細かいので、「粒戦」よりゆっくり落下することからくい渋り時や反応の遅いへら鮒へのアピールに有効。

ベースエサ

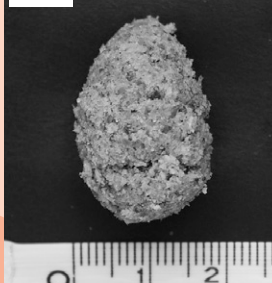


セットガン

まとまりの良いエサでありながら水中での開きは良く、なおかつ縦系に落下する特性がある。落下速度の微調整はタッチを変えれば可能でしっとりネバにすると速度が速くなる。

●エサの大きさ

実寸大



ガッテン

粘りをだすときに有効なエサで、粘りによるまとまりで水中落下時の開きをセーブさせる。



スーパーダンゴ

「ガッテン」とは反対にタナに落ち着いてから開く特性があり、集魚効果も高い。また、軽めなのでタナで漂う効果もある。

ブレンドエサ

ブレンドの調整

へら鮒の動きが悪く、縦系のバラケエサと同時にタナで膨らむバラケエサが必要ときには「ガッテン」を「GTS」に替えると開き方に変化がでて反応することが多い。



様々なバリエーションを使いこなそう くわせ(ウドン)エサ大解剖!

近年、ウドンセット釣りはむずかしくなっていると言われて久しいが、そういった状況のなか、バラケエサの研究だけでなくくわせエサも色々工夫され、様々な商品やアレンジがなされている。なぜ、これほど多種多様のくわせエサが生まれてきたのかといえば、へら鮎の活性は日や時間によって変わる。それに合わせるように釣り方の種類が豊富になり、その

釣りに見合ったエサが必要になる。さらに、同じ釣り方であっても目先の変化や、その日の当たりエサを探るためにも数多くの種類が必要となったのだ。くわせエサひとつ変えるだけで、アタリが倍増ということもある。それだけ、重要な要素というわけだ。ここでは、最近流行しているくわせエサを紹介するので、それらを上手く使い分けてみよう。

さなぎ玉

さなぎ玉とは、「カ玉」や「カ玉大粒」に「さなぎ粉」で漬け込んだもの。「さなぎ粉」による集魚効果、茶色の色づけ効果、また、水分を吸われることにより「カ玉」や「カ玉大粒」が締まるので、エサ持ちアップにも貢献している。数年前より実績がでていたが、現在では最も主流のくわせエサとなっている。

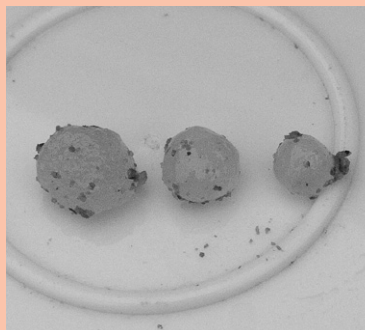


●作り方

「カ玉」または「カ玉大粒」1ピンすべてをボウルにあげ、そこに「さなぎ粉」(目安は50cc)を入れる。ボウルを揺るようにして「カ玉」または「カ玉大粒」に「さなぎ粉」をまぶす。それをタッパーなどに移しかえればOK。2〜3日経てば使える。また、より時間が経過すれば、大きさが小さくなり、色が濃くなる。最初から小さくしたいときは、キッチンペーパーでいったん水気を取ってから「さなぎ粉」に漬ければよい。大きさ、色、硬さのバリエーションを数種類揃えれば完璧だ。



注ぎ足し注ぎ足しでタッパーに入れておくと便利。



左から「カ玉大粒」、「カ玉」、「カ玉」をキッチンペーパーで水気をとってから漬けたもの。

細粒感嘆

細粒感嘆とは、「感嘆」と「粒戦細粒」を混ぜたもの。ペレットによる集魚と色付け、若干の重さ付けの効果がある（さなぎ玉よりは軽い）。「感嘆」のメリットは、現場で作るので水分量による硬さ調整が可能なこと、大きさの調整が自由自在なこと。「さなぎ粉」を混ぜる「さなぎ感嘆」も有効。



●作り方

「感嘆」1袋に対して「粒戦細粒」を50cc加える。封をして上下左右に振って良く混ぜあわせればOK。ノーマルなもの間違えないように袋に印を付けておくとよいだろう。作るときは粉20ccに対して水25～27cc。「感嘆」と同じようにポンプ出して使う。



①「感嘆」1袋に対して「粒戦細粒」を50cc入れる。②封をして逆さにしたりして混ぜ合わせる。③混ざったものは、まだらなコーヒー色に近い。④作るときはカップに水25～27ccを入れる。⑤そこへ「細粒感嘆」20ccを入れる。⑥指でよくかき混ぜる。⑦出来上がったものは茶色。⑧ポンプに詰めて押し出して使う。



“細粒感嘆”と同様のやり方で、「感嘆Ⅱ」1袋に「感嘆」50ccを入れるパターンもある。こうすると、若干軽くなり、レモン色に仕上がる。



指玉

指玉とは、混雑時や厳寒期などで極端にうき洗いにときに有効な「感嘆」や“細粒感嘆”を極小にハリ付けしたもの。



水で濡らしたウキの足を「細粒感嘆」を入れた容器に入れ、付いてきた粉をこそぎ取るようにして指先で丸める。使用するハリは2号（くわせタイプ）を目安とする。

バランスの底釣り

釣り方の基本とコツ

底釣りの魅力は、なんと言ってもあの独特なウキの動きにあります。全国的にも底釣り釣れる池も多く、人気のある釣り方です。釣れるタナを探りながら微調整を繰り返すのがコツで、1日それを繰り返しながら飽きることもなく釣りができるのもファンが多い理由でしょう。

そして、秋から冬、春先までは、気温・水温・気圧

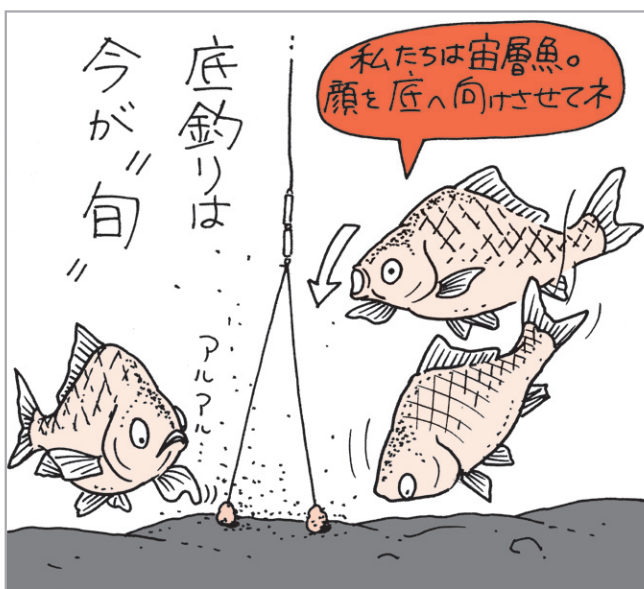
が下がり、それにもないへら鮒の活性も下がります。すると、比較的水温が安定している底近くにじっとするようになります。へら鮒は宙層魚ですので、底にべったり着くことは少ないですが、底周辺にはいます。そして、エサをくわせるために底へ向けさせて釣るのが底釣り。

この時期は宙層でエサが捕まりにくく、底までエサを持たせやすいので、底釣りには

最適な季節。この時期こそ底釣りを楽しんでください。

この釣りは、エサ勝負ではなくタナ勝負です。それなりに活性がある年内は、ウキも動く時期ですので、エサ・仕掛け・タナがピッタリと決まるとそれこそ面白いように釣り込めます。また、新ペラの入る時期、サオ一杯でなくあえて沖の底をねらうのもあります。

釣っていくための一番のポイントは、タナの決め方。正確に水深を測ることはもちろんですが、それはあくまで目安であり、実際に釣れるタナとは限りません。スタートは上バリトントンではじめ、そこから微調整していきます。タナをいじるときは、活性がある場合は1cm、渋いときは3〜5mm（ウキ止めゴム1〜2ヶ分）単位で動かします。人間にとって



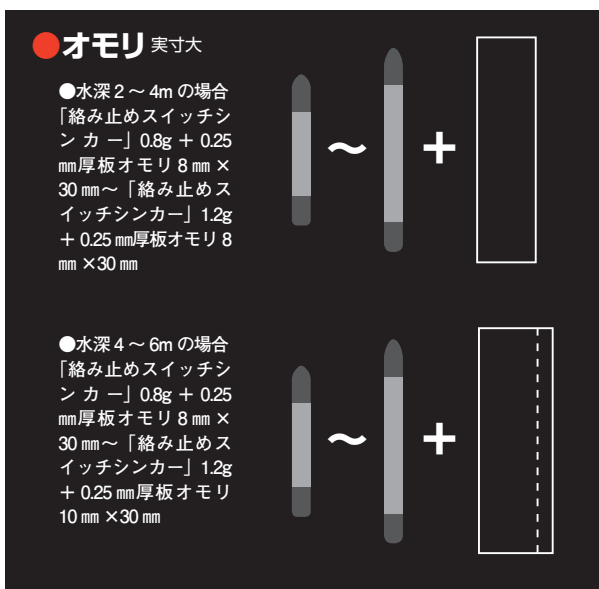
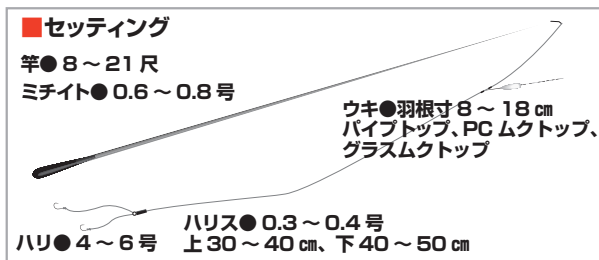
はたかかと思われる数値かもしれませんが、これによって底に付いたエサの傾きが微妙に変わります。それがくいやすいかどうかは、その日のへら鮒が判断することですが、かならずくいアタリがでやすいタナがありま

すので、それを見つけることが釣果に結びつきます。また、竿の振り込み方によってもこれは変わりますので、それも意識してください。

ウキの動きは、いったんなじませてからの戻りを重視してください。ウキが戻

セッティングの注意点

底釣りでは、ウキのナジミ幅と戻しがすべての情報源となります。そのためにもエサ落ち目盛りの設定を精度をもって行ないます。また、釣っている途中でもおかしいと感じたときはかならず確認するようにしましょう。仕掛け全体としては、とくに通常の範囲であれば問題ありません。ウキもある程度オモリ量を背負うものであれば素材は自分の使いやすいもの、トップが見やすいものを使えばよいでしょう。ラインやハリも極端な大仕掛けは避けるべきですが、ハリは大きさは同じでも重さの違うものがありますので、それを上手に使い分けて下さい。



るとするのは魚がエサに反応してエサやハリスなどを煽るからでる動きです。そして、このウキの戻し（返し）のあとにアタリがでるかわからないかでエサのタッチや持ち具合を判断するわけです。理想は戻してすぐにチクツとアタリがでることですが、

なかなかアタリがでないときは、エサがぐいにくい、または持っていないなどと判断しましょう。また、アタリがでて空振ったときもエサのタッチなのか、持ち具合なのかを考えていきます。また、戻しがでないときはタナが違っているか、エ

サが開かなすぎている可能性がありますので、もう一度タナを確認するなどして、戻しの動きがでるように調整してください。ナジミ幅も重要ですが、それは使うエサや振り込み方によって変わってきますので、自分なりの基準を持つて

釣っていきます。その基準を頼りに、ナジミすぎた場合は、底のヘド口などが掘れた、エサが粘ってきた、振り切りすぎた、仕掛けが絡んだなどと判断し、逆にナジミが少ないときは、エサが持っていない、仕掛けが伸びたなどと考え対処していきます。

おすすめブレンド

見た目からして釣れそうな簡単ブレンド

とろスイミー 50cc + ダンゴの底釣り冬 100cc + 水 100cc



●作り方

エサをボウルに入れてかき混ぜてから水を注ぎ、手早く 20～30 回かき混ぜる。水がいき渡ってまとまりだしたらボウルのはしに寄せてしばらくおく。半分か 1/3 程度に小分けして使う。

●特徴

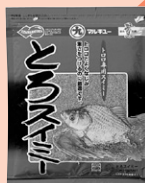
張りがあり弾力性に富んだ仕上がりで非常にエサ付けもしやすく、また見た目の濃い緑色がいかにも釣れそうな印象。エサ持ちは非常に良く、21 尺一杯のタナでも使える。落下中のバラケ性は少なめで、底でマリモ状に膨らむ。

●使い方のコツ

打ち始めは小分けしたものに軽く押し練りを加えて打ち始める。これでナジミ幅が少ないようなら 2、3 度繰り返す。手水によるタッチの調整とエサ付けの際の形などで状況に対応していく。ウキの動きが少ない場合は「バラケマッハ」、エサ持ちは悪い場合は「粘力」を加える。

両ダンゴの底釣り

ブレンドの考え方



とろスイミー

軽めの「ダンゴの底釣り冬」に重さをつけ、スイミーの効果で集魚力もアップ。エサ全体をマイルドに仕上げる役目も担う。



ダンゴの底釣り冬

軽めで活性の下がったへら鮒が吸い込みやすい底釣りエサ。集魚力があってエサ持ちが良いので待つことのできるエサ。

ブレンドの調整

エサ持ちが悪い場合や水深がある場合は、手水を打って押し練りし、そこに「粘力」を振りかけて押し込むように混ぜて使う。逆に寄りが悪い場合は、「バラケマッハ」を少し振りかけて押し込む。



●エサの大きさ

実寸大



エサは小分けして調整すること。基本は手水を打ってからの押し練り。

おすすめブレンド

2タイプのエサで釣り切れる

タナ（底）出膨らむタイプ

いもグルテン50cc＋
グルテンα21 50cc＋水100cc



●特徴

重さとエサ持ちを重視したブレンドで、ピンポイントでへら鮎を寄せて釣っていくときに有効。

落下中から開くタイプ

新べらグルテン底100cc＋
本グル 100cc＋水200cc



●特徴

開きとエサ持ちを兼ね備えたブレンド。広範囲にへら鮎を寄せて釣っていくときに有効。

両グルテンの底釣り

ブレンドの考え方



いもグルテン

へら鮒の好むサツマイモを配合したグルテンエサ。重さがあるのでウギをしっかりとナジませられ、ウワズリにくく底への集魚に威力を発揮する。



グルテンα21

グルテン繊維が強くエサ持ちは抜群なのでしっかり待てる。軽めのエサで「いもグルテン」とのブレンドで重さのバランスをとっている。



新べらグルテン底

新べらが好むボンタッチタイプのグルテンで、底釣り向きに重さを加えた。マッシュの抜けがよいので、落下中からアピールできる。



本グル

強めのグルテン繊維がマッシュと絡み、深いタナまでしっかり持つ。軽めなのでへら鮒の吸い込みも抜群。

●作り方

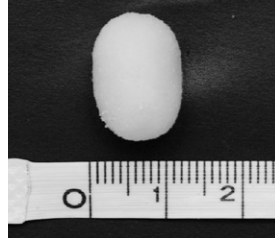
どちらのブレンドも粉のうちにいったん混ぜてから水を注ぐ。全体をよくかき混ぜてしばらく放置し、固まりだしたら掘り起こすようにしてボウルのはしに寄せて置く。

●使い方のコツ

ボウルのはしに寄せたグルテンを摘んで使っていくが、表面が乾くのでときどきひっくり返して使っていく。エサ持ちに影響するので、ハリに残ってきた繊維のカスは必ず取り除いてからエサ付ける。

●エサの大きさ

実寸大



おすすめブレンド

万能バラケと調整幅の広いくわせブレンド

バラケ

ダンゴの底釣り冬100cc + ペレ底100cc +
バラケマツハ100cc + 水150cc



+



+



+



●作り方

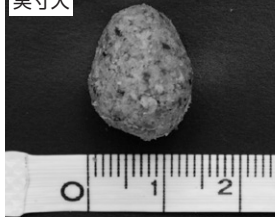
すべてのエサをボウルに取り、良く混ぜてから水を注いで20～30回かき混ぜる。水がいき渡ったらボウルの底面に均等に広がるようにして約5分間放置。麩材が吸水して硬さが安定したらザックリと解してボウルの隅に寄せておく。

●特徴

底釣り用バラケにとっての必須条件であるまとまり感と比重はもちろんのこと、ペレットと開く麩材の効果による集魚力を高めている万能タイプのブレンド。新べらに対しても有効で、元々ペレット系のエサに対して反応が良い釣り場では旧べらを含めてターゲットにできる優位性を持つ。

●エサの大きさ

実寸大



ブレンドの調整

くいが極端に落ち込むとペレットによる摂餌刺激が強過ぎてしまい、返って反応が鈍ることがある。そのようなときには「ペレ底」を「とろスイミー」に替える（量は同じ）ことでマイルド感が加わり、さらにタッチのうえでのザックリ感が増すことで、底に着いてからのバラケが早まり横方向への広がりも大きくなる。



グルテンセットの底釣り

くわせ

グルテンα21 50cc＋
わたグル 50cc＋水120cc



+

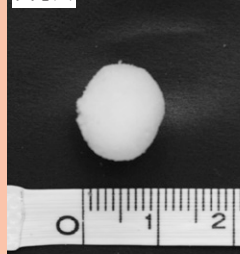


+



●エサの大きさ

実寸大



●作り方

2つのグルテンエサを正確に計量し、ボウルに入れたら良く混ぜてから水を注いで20～30回かき混ぜる。水がいき渡ったらボウルの底面に均等に広がるようにして約5分以上放置。固まったら指先で底から掘り起こすようにして解してボウルの隅に寄せておく。

●特徴

グルテン繊維のタイプは異なるが、いずれもグルテン量が豊富な2種類を組み合わせたパターン。比重は軽めだが調整幅が広いのが特徴で、押し練りを加えずにそのまま使えば開きの早い速攻タイプ、手水と押し練りを充分に加えれば持ちの良い厳寒期向きのくわせエサとして有効。

●使い方のコツ

冬場の底釣りにおいてウワズリは禁物。そのため重めのバラケで焦らずにじっくり寄せて、吸い込みの良い軽めのくわせエサで確実にくわせるという組み立て方が常道。バラケの基エサは重く開きを抑えて硬めに仕上げておき、手水を加えることにより開く方向へと徐々に調整する。くわせエサはくいの良し悪しに合わせてエサ持ち加減を調整。くいが良いときはボソツとした開きの良いタイプ、悪いときはネバリのある軟らかめとする。

グルダンゴの底釣り メリットとエサ使いのコツ

グルダンゴは、文字どおりグルテンエサとダンゴエサを混ぜた、あるいは合体させたエサです。グルテンより集魚力がありながら、ダンゴほど重くないので落下のアピールができ、また、グルテン繊維によるエサ持ちもあるので、非常にメリットの高いエサです。

季節が冬に近づけば、次第にダンゴへの反応が悪くなっていきますが、両ダンゴがダメならすぐさまグルテンかといえば、グルテンでは寄せる力が足りないな、という場合もあります。また、新べらが放流される時期でも、両グルテンがかならず正解とは言えません。ですから、エサのバリエーションのひとつにグルダンゴも加えておくと、いざというときに役立つのです。

グルダンゴはこれひとつ

で、バラケとグルテンのセットのような寄せてくわせるという役目をしますが、セツト釣りとは違い、共エサとして使えることに大きなアドバンテージがあります。共エサは2つの同じエサを使いますから、ある程度エサが決まればバラケエサほど気



グルテンエサとダンゴエサを混ぜたもの、あるいは合体させたものがグルダンゴ。

合体エサの場合、均一に混ざりあっていないので、摘むところによってダンゴ寄りであったり、グルテン寄りであったりするので、それを有効に活用する。



を使う必要はなく、底釣りにとって肝心のタナに集中して釣り込めるのです。

また、両ダンゴはタッチをいじりながら調整していきませんが、グルダンゴも同じように両ダンゴ感覚で使えます。とくにダンゴエサとグルテンエサを一緒混ぜで作る場合は、ほぼ両

ダンゴと同じと考えたほうがエサ使いが簡単になります。

もう一方のダンゴエサとグルテンエサを別々に作る合体エサの場合は、ダンゴとグルテンが均一でなくまだらに混ざっていますので、摘んで使う部分によって、ダンゴ

寄りであったりグルテン寄りであったりします。それを意図的に使い分けることで、

状況に合わせていくことができます。さらに、ダンゴとグルテンの比率を思いどおりに変えられるので、より状況に合わせたエサ使いが可能となるのです。



合体エサ

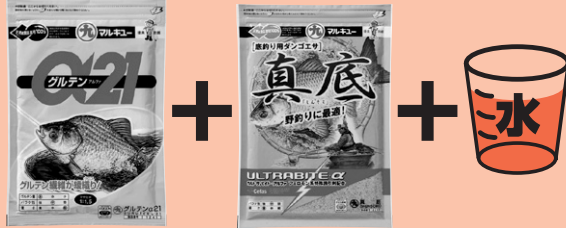


一緒混ぜエサ

おすすめブレンド①

集魚力に優れ、両ダンゴ感覚で使える

グルテンα21 50cc+真底50cc+ 水100cc



●作り方

エサをボウルに取り、均一に混ぜり合うよう良く混ぜてから水を注いで15～20回かき混ぜる。水がいき渡ったらボウルの底面に均等に広がるようにして約5分間放置。完全に吸水したところで良く解してエアを含ませておく。乾燥を防ぐために濡れタオルなどを被せておくと良い。

●特徴

冬の釣りの定番くわせエサ「グルテン α21」のエサ持ちの良さに「真底」の集魚力を加えたブレンドパターン。別々に単品で仕上げしてから混ぜ合わせたもの比べて均一に仕上がり、なおかつ手揉み加減ひとつでエサ調整が幅広くできるのが特徴。エサの扱い方（調整方法）についてはグルテンよりも両ダンゴ感覚で臨むほうが良い。

●使い方のコツ

「グルテン α21」に含まれるマッシュの効果でホクホク、サラサラタッチに仕上がる。手揉みを加える程にエサの開きが遅くなる性質を理解したうえで、寄せを強化したいときは揉み込む回数を少なくし、くわせにかかるときはやや多めに揉んで開きを抑える。そして、厳寒期の待ち釣りの場合は十分に揉み込むことでエサの開きを極力抑え、時間をかけてエサに近づいてくるへら鮎に対し、エサの芯が小さくなくてもハリに残るようにする。

おすすめブレンド②

重さと集魚力でピンポイントでくわせる

ペレ道100cc+ペレ底100cc+
いもグルテン 50cc+水150cc



●作り方

3つのエサをボウルに取り、均一に混ぜり合うよう良く混ぜてから水を注いで30回ほどかき混ぜる。ひとまとまりになったらボウルのはじに寄せてしばらく放置。その後ひっくり返してから使い始める。仕上がりはポソツとしており、まだらな感じがあっても良い。

●特徴

「ペレ道」、「ペレ底」のペレットによる強力な集魚力と重さ、底釣りに適した重さのある「いもグルテン」という組み合わせで、底にしっかりエサを着けて釣っていくことができる。開きが少なめなのでピンポイントにへら鮎を寄せて確実にくわせることができるので、ヒット率が高く釣り込んでいる。

●使い方のコツ

落下中のアピールを強調したいときは、ポソツとした仕上がりをそのままいかしてエサを軽く使う。逆に落下中のサワリを抑えたい場合は、軽く手もみを加えて表面をきれいに丸めて使えば底で膨らむエサとなり、へら鮎を底へ呼び込める。ただし、あまり手もみをしすぎると膨らみがなくなってしまうので注意したい。

おすすめブレンド③

エサ持ち・くわせ重視のペレット系ブレンド

粒戦50cc＋粒戦細粒50cc＋
本グル100cc＋粘カスプーン1杯＋
水200cc



●作り方

すべてのエサをボウルに入れ、良くかき混ぜてから水を注ぐ。人差し指と中指を揃えるようにして指2本でよくかき混ぜる。しばらくおいて固まりだしたらボウルのはしに寄せておく。

●特徴

しっかり持つエサでくわせを重視したブレンド。「本グル」の強い繊維がブレンドした「粒戦」と「粒戦細粒」と絡まり、膨らんでマッシュが抜けるときに一緒に抜けてへら鮎の興味を惹く。「粘力」を入れることで、開きのタイミングを遅らせている。

●使い方のコツ

ボウルのはしに寄せたエサを摘んで丸めて使っていく。軽く丸めて使えばエサは軽く、手もみを加えればエアが抜けて重く使える。また、ペレットが多い部分、グルテンが多い部分で重い・軽い、寄せ・くわせとウキの動きを見ながら打ち分けるとよい。

おすすめブレンド④

合体エサで自由自在にいじっていきける

A

とろスイミー50cc＋
粒戦細粒50cc＋水50cc



B

本グル50cc＋
粘カスプーン1杯＋水65cc



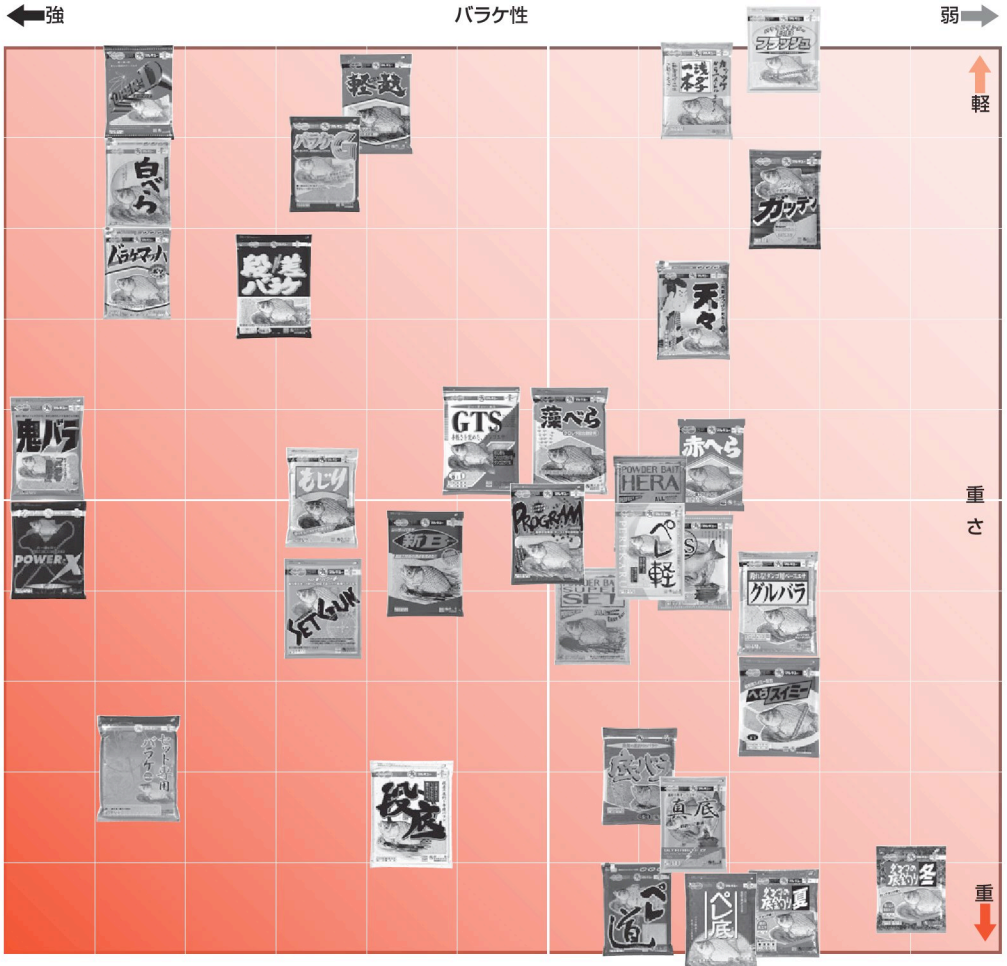
●特徴

上記のAとBをそれぞれ別のボウルで作って合体させて使うことで、ダンゴに近いエサからグルテンに近いエサまで、自由自在に好みのエサが、それこそ1投ごと使い分けられる。

●使い方のコツ

できあがったBにAの半分を混ぜて打ち始めていく。きれいに混ぜる必要はなく、適当に好みの部分を摘んで使えばよい。動きが悪いようなら残っているAを少しずつたしていく。

麩系バラケ・共エサ



※データは、標準水量を加え、単品使用の当社実測によるものです。釣り場の状況や作り方、使い方により異なる場合がありますので、目安としてお使いください。

降り注ぐ粒、粒、粒、粒!

あらゆるセット釣りに対応するバラケ専用ベースエサ「セットガン」

圧倒的な集魚力を備えた特別加工のさなぎの粒。

寄せたへら鮒をくわせに導く、黄色い高機能ベレットの粒。

作りたてのタッチが長時間続く、粒子感の強い魅の粒。

形状や重さの異なる様々な粒状の素材が、

これまでにない視覚効果の強いタテバラケを実現。

高活性時における寄せ重視のパワー系から、

食い渋り時における繊細なライト系まで、

射程圏の広い新たな

バラケ専用ベースエサが誕生した。



●セットガン 370g



ハリ付けするまで作りたてをキープ。
進化した三代目「わらび職人」。
●わらび職人 120g

マルキューチーフインストラクター横山天水が、新製品「セットガン」の使いこなし術を実釣解説。詳しくは、へら鮒天国「釣技最前線」で。

